

「子宮頸がん」についてご説明します。

子宮頸がんは、がんになる前の「前がん病変」という段階を経て進行することが多く、この時期にはほとんど症状がありません。そのため、症状がなくても検診を受ける体制が整えられています。不安なことがあれば医療機関へ相談し、ご本人やご家族で十分に話し合ったうえで接種をご検討ください。



ただし、ワクチンだけで子宮頸がんを完全に防ぐことはできません。そのため、子宮頸がん検診も非常に大切です。自治体では2年に1回の検診が推奨されていますが、検診を定期的に受けることで、自覚症状がない段階で異常を見つけられる可能性が高くなります。

一方、目で確認できる大きさまで進んだ場合には、子宮を摘出する手術が必要となることがあります。がんの広がりによっては、子宮の周囲の組織や膣の一部まで切除する広い手術が必要となり、術後に排尿障害が生じて自己導尿が必要になることもあります。

近年は腹腔鏡手術やロボット支援手術も普及していますが、がんを確実に治すために開腹手術が適している場合もあります。

治療は、がんの進行具合によって異なります。ごく早期であれば、子宮の入り口を円錐状に切除する「子宮頸部円錐切除術」のみで治療が期待でき、子宮を残せる場合もあります。

肺や肝臓など離れた臓器へ転移した場合には、抗がん剤治療が中心となります。最近では免疫の働きを利用した薬を組み合わせることで、治療成績は向上していますが、副作用によつて日常生活に影響が出ることもあります。そのため、何よりも早期に発見し、早い段階で治療を始めることが重要です。

将来妊娠・出産を希望される方は、がんの進行状況によつて子宮を温存できる治療を選択できる場合があります。また、妊娠中に子宮頸がんが見つかることもあり、その際はお母さんと赤ちゃん双方の安全を考えながら治療方針を決定します。

大切なのは、「HPVワクチン」と「子宮頸がん検診」の2つです。お子さんやご家族の将来を守るためにHPVワクチンについて考え、ご自身の健康を守るためにも定期的に子宮頸がん検診を受けましょう。それが、子宮頸がんから命を守る最も確実な方法です。



治療について

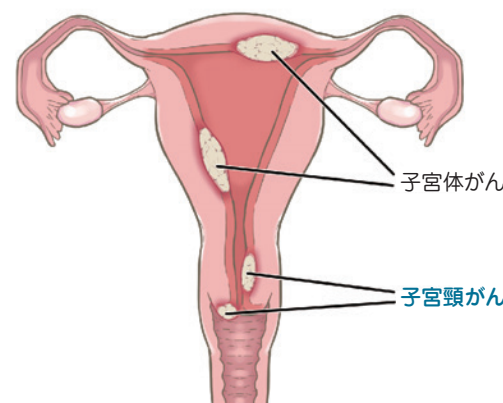
進行すると、不正出血や悪臭を伴うおりものがみられるようになります。さらに進行すると、尿や便を出すための臓器へ広がり、下腹部や腰の痛み、血尿・血便・足のむくみなどの症状が現れることがあります。

手術以外には、放射線治療と抗がん剤を組み合わせた「化学放射線療法」があります。手術と同等の治療効果が期待できる一方で、治療後しばらくしてから腸や膀胱に放射線の影響が現れることがあります。どの治療法にも長所と短所があるため、主治医と十分相談しながら治療方針を決めることが大切です。

おわりに

子宮頸がんは予防できる可能性が高く、早期発見・早期治療によつて治療が期待できるがんです。一方で、進行した状態で見つかる方の中には、長い間検診を受けていなかった方も少なくありません。

子宮頸がんは、子宮の入り口（子宮頸部）にできるがんです。子宮頸がんは予防できる可能性が



子宮頸がんとは

高いがんといわれています。日本では毎年約1万人が新たに子宮頸がんを診断され、約2,700人が命を落としていきます。多くのがんは高齢になるほど増えますが、子宮頸がんは20〜40歳の比較的若い世代にも多くみられることが特徴です。子育てや仕事に忙しい年代で発症することもあります。

子宮頸がんを予防するために最も重要なのが、HPVワクチンです。性交渉を経験する前に接種することで、子宮頸がんの多くを予防できることが世界中の研究で明らかになっています。日本では一時期、接種後の症状

予防するためには

あり、決して特別なウイルスではありません。多くの場合は自然に体から排除されますが、一部では感染が長く続き、数年から十数年かけて子宮頸がんへ進行することがあります。

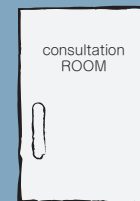


への懸念から積極的な接種勧奨が中止されていましたが、その後、多くの研究によりワクチンの有効性と安全性が確認され、現在は定期接種が行われています。万が一接種後に体調の変化がみられた場合にも、相談・診療でき



産婦人科 科長
植田 牧子
うえだ まきこ

きょうは
産婦人科
です



こんにちは
診察室です。

子宮頸がんについて

「ぜひいから」ここにちには診察室です。のバックナンバーがご覧いただけます。

